

## ジオパークの目指すもの Geopark

尾池 和夫<sup>1\*</sup>  
OIKE, Kazuo<sup>1\*</sup>

<sup>1</sup> 日本ジオパーク委員会委員長, 京都造形芸術大学

<sup>1</sup>Chairman, Japan Geopark Committee, Kyoto University of Art and Design

### 概要

地球の活動で形成された地形を観察し、大地の恵みに育まれた野菜や果物を味わい、私たちはジオパークの自然現象や地域の歴史を学ぶ。日本列島の自然の基本的な特徴は、地震の発生、火山の噴火、それらによる津波と言える。そのような変動帯に位置する日本のジオパークは、自然災害の中で暮らしてきた日本の人びとの文化が紹介される大地の公園でもある。2013年12月現在で、33か所が日本ジオパークに登録され、その中の6か所が世界ジオパークネットワークに加盟認定されている。日本列島の自然の美しさから、私たちはさらに学び続けるとともに、それを世界の人びとに紹介し続けたいと思う。

キーワード: ジオパーク, 日本ジオパーク委員会, 日本ジオパークネットワーク

Keywords: Geopark, Japan Geopark Committee, Japanese Geoparks Network

## 地域自立のツールとしての自然公園 Nature parks as a tool for local sustainable community

松田 裕之<sup>1\*</sup>  
MATSUDA, Hiroyuki<sup>1\*</sup>

<sup>1</sup> 横浜国立大学環境情報研究院  
<sup>1</sup>Yokohama National University

ユネスコ「人間と生物圏」計画（以下、MAB計画）は1970年に発足した。生物圏保存地域（日本での通称ユネスコエコパーク）はMAB計画が定める自然公園である。ユネスコエコパークは翌1971年に発足したユネスコ世界自然遺産と異なり、世界に二つとない貴重な手付かずの自然を守るといふより、持続可能な人間活動と自然保護の両立を図る取り組みである。初期には学術活動としての利用が主目的で、厳重に保護された核心地域とその周囲の緩衝地域だけだった。日本の森林生態系保護地域はユネスコエコパークをモデルにしたと言われている。

そのユネスコエコパークも1995年に変貌し、自然の恵みの持続的利用を図る移行地域が緩衝地域の周囲に設定されるようになり、地域振興の手段となりえるものになった（図1）。原生自然の保護（Protection）から持続的利用を図るための生態系保全（Conservation）への変貌は、世界の自然保護思想の変遷の歴史である。

ユネスコエコパークは上意下達型よりも利害関係者の参加型の運営を推奨する。日本では白山、大台ヶ原・大峯山、屋久島、志賀高原が1980年に政府主導で登録されて以来、2012年に綾が32年ぶりに登録された。綾の登録に際しては国内の審査基準や申請手続きも未整備な中で、文字通り参加型の手探りの取り組みを続けた。この取り組みはユネスコ本部でも高く評価された。

綾は、ユネスコエコパーク登録のために特別なことをしたというよりは、地域の持続可能な自然資源の活用の取り組みが先にあった。それをMAB計画の文脈で説明したに過ぎない。地域の取り組みが世界の手本となるという価値を見出し、実感していただくことが、ユネスコエコパークの意義とも言える。

既存の上記4つの登録地では、国立公園の自然保護事務所が公式の連絡先となっていたが、地元自治体からは登録自体が忘れ去られ、形骸化していた。ユネスコの取り組みということで、当初は教育委員会が窓口となっていたが、環境課が対応し、その後は企画課など地域振興に携わる部署が直接乗り出す市町村が増えてきた。

多くの国立公園がそうであるように、自然豊かな核心地域は県境を跨ぐことが多く、県同士や市町村の連携が欠かせない。世界認証を頂くことで、連携の求心力が生まれることもあるだろう。国定公園の管理は県が担うが、参加型の連携が推奨されるユネスコエコパークならば県同士の連携の求心力にもなる。

自然資産を持続可能に生かす地域振興の取り組みはさまざまある。共通点を持ちつつも、それぞれが異なる体制、価値、歴史、担い手、経済事情を持っている。どれが最善ということはない。世界認証にも良いところと煩わしいところがある。専門家の役割は、その地域の特徴と目標にあった制度を紹介することである。自然資産を生かす地域振興の拡大とともに、それにかかわる専門家の多角的な取り組みの発展が期待される。

図1 ユネスコエコパークの核心・緩衝・以降地域の役割  
Role of core, buffer and transition areas in biosphere reserves

キーワード: UNESCO, MAB, biosphere reserve  
Keywords: UNESCO, MAB, biosphere reserve

006-02

会場:メインホール

時間:4月30日 09:26-09:51



## レジデント型研究という視点から見たジオパークの可能性 Geopark from the viewpoint of residential research

菊地 直樹<sup>1\*</sup>  
KIKUCHI, Naoki<sup>1\*</sup>

<sup>1</sup> 総合地球環境学研究所

<sup>1</sup> Research Institute for Humanity and Nature

レジデント型研究とは、地域社会に定住する科学者・研究者であると同時に、地域社会の主体の一員でもあるという立場から、地域の実情に合った問題解決型の研究を推進する方法として、新たに提唱されたものである。報告者は兵庫県立コウノトリの郷公園の環境社会学の研究者として、兵庫県豊岡市周辺において進展している絶滅危惧種コウノトリの野生復帰プロジェクトに参加し、レジデント型研究者としての経験を積んできた。この地域は、山陰海岸ジオパークのエリアでもあるため、コウノトリの野生復帰とジオパーク活動は相互に関係しており、報告者はジオパーク活動にもある程度かかわってきた。この個人的経験から、レジデント型研究という視点から、地域の課題解決へのツールとしてのジオパークの可能性について、考えてみたい。

キーワード: レジデント型研究, 地域環境知, コウノトリの野生復帰, 順応的ガバナンス

Keywords: residential research, integrated local environmental knowledge, re-introduce project of the oriental white stork, adaptive governance

## ガイドの目から見たジオパーク ～土砂災害被災後に思う～ Think about the Geopark - After landslides disaster from the eyes of the guide

西谷 香奈<sup>1\*</sup>  
NISHITANI, Kana<sup>1\*</sup>

<sup>1</sup> 伊豆大島ジオパーク  
<sup>1</sup> Izu Oshima Geopark

私がジオパークを知ってから3年半が経った。私は地球と動植物と人間が関わり合う物語に魅了されながらガイドを続けてきた。私にはツアーは毎回「世界にただひとつの物語」のように感じられた。それは、お客様の感性や、不思議を発見する目、知識や、経験がそれぞれ違うためだと思う。

今年の10月16日、伊豆大島では台風26号の大雨による土砂災害で、36名の方が亡くなり、3名が行方不明となった。私たちは「水はけが良い若い火山の島」「津波や噴火は怖いが洪水は心配ない」と思っていた。私たちにとって災害は予想外の出来事だった。

私は「危険に気づけなかったこと、被害にあわれた方達に伝えられなかったこと」に、やりきれない思いを感じた。もし私がそれを伝えられていれば、無くさないですんだ命があったはずだった。そして、災害前は簡単に語っていた言葉「私たちは火山が作った大地の上に住んでいる」の奥には、たくさんの悲しみや、大変な思いがあることを実感した。

今、伊豆大島は復興に向けて歩み始めている。そこには時間の経過とともに変化する様々な問題がある。私は災害や復興に向き合うことが、ジオパークそのものであると感じている。

伊豆大島では災害1ヶ月後の11月には火山専門家による住民セミナー、2月に島原半島ジオパーク、三陸ジオパーク、そして三宅島から講師を招いて話しを聞いた。異なる地域と情報を共有したことは、島民にどのような変化をもたらしたのだろうか？

災害後の様々な取り組みを通し、ジオパークのネットワークとしての役割を考察する。

キーワード: ジオパーク, ガイド, 伊豆大島, ネットワーク, 災害, 役割  
Keywords: geopark, guide, Izu Oshima, net work, disaster, rule

## 審査はどのように行われるか ー公開プレゼンテーション趣旨説明ー Summary of the evaluation process of Japan Geopark Committee

渡辺 真人<sup>1\*</sup>  
WATANABE, Mahito<sup>1\*</sup>

<sup>1</sup> 産業技術総合研究所地質標本館  
<sup>1</sup> Geological Museum, Geological Survey of Japan, AIST

日本ジオパーク委員会（JGC）は2008年に国内のジオパークの審査を開始した。その後、日本ジオパークネットワークの協力を得て、各ジオパークの経験豊かな専門家を現地審査員に加え、現在は詳しいチェックリストをもとに現地審査を行っている。

審査の最終決定を行うのは11人のJGCメンバーである。その他に、各ジオパークから1ー2名を選出して現地審査員・現地補助員候補とし、JGCメンバーとともに日頃から情報交換をメールベースで行い、年に2度集まって審査の手法やチェックリストの内容を検討する仕組みが昨年から立ち上がった。書類審査を11人のJGCメンバーで行った後、JGCメンバー一人、各ジオパークからの現地審査員・補助員それぞれ一人で現地審査を行う。書類審査と現地審査を合わせてジオパークを評価し、三人で報告書を作成し、それをJGCで検討して最終決定を行っている。

ジオパークの評価の対象は、ジオパークの名称とテーマ、地質・地形遺産の科学的価値、その保全状況、研究活動、教育活動、各サイトをつないで説明していくストーリー、管理運営体制と人員配置、野外の説明板やパンフレットの質、広報の状況、中長期計画の内容など多岐にわたっている。毎年の審査の経験を元に、審査のチェックリストも改訂されており、よりよい審査を目指している。

キーワード: ジオパーク, ユネスコ, 世界ジオパークネットワーク, 日本ジオパークネットワーク, 日本ジオパーク委員会  
Keywords: Geopark, UNESCO, Global Geoparks Network, Japanese Geoparks Network, Japan Geopark Committee



## 南から来た火山の贈りもの 伊豆半島ジオパーク volcano gifts from the south Izu Peninsula Geopark

吉川 馨<sup>1\*</sup>; 堀野 順章<sup>1</sup>; 石井 千春<sup>1</sup>; 佃 弘巳<sup>1</sup>; 小山 真人<sup>2</sup>  
YOSHIKAWA, Kaoru<sup>1\*</sup>; HORINO, Yoshiaki<sup>1</sup>; ISHII, Chiharu<sup>1</sup>; TUKUDA, Hiromi<sup>1</sup>; KOYAMA, Masato<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 伊豆半島ジオパーク推進協議会, <sup>2</sup> 静岡大学

<sup>1</sup>Izu Peninsula Geopark Promotion Council, <sup>2</sup>Shizuoka University

伊豆半島は、かつて南洋に位置した火山島であり、フィリピン海プレートの北進に伴い火山活動を繰り返しながら本州に衝突して誕生した。このような成り立ちとともに、現在も火山活動や地殻変動が続く伊豆半島は、ダイナミックな地球の活動を感じることもできる、世界でも同種の例を見ない地球上の特異点とも言える地域である。

半島では、その成り立ちを示す証拠を半島内の各地で目にする事ができる。深い海での火山活動から浅い海での活動への遷り変り、本州との衝突に伴う変動、陸化後の火山活動、現在も続くさまざまな変動という大地のストーリーを連続的に知ることができる。

伊豆半島は、ジオパークの仕組みを活用し、自然・歴史・文化の保全と観光をはじめとした地域振興、教育、防災への取り組みを推進するとともに、他地域のジオパークとの交流・連携を行い、ジオパーク全体の発展にも貢献している。

2011年3月末に伊豆地域13市町と関係団体により伊豆半島ジオパーク推進協議会が設立され、2012年9月には日本ジオパークネットワークへの加盟が認められた。2013年12月には、北部の2町のエリア拡大が認められ、現在15市町で活動が行われている。

エリアの拡大や日本ジオパークへの貢献、内外への情報発信の必要性から、2013年12月には専任研究員（人文地理分野）を一名増員し、ニューズレターやフェイスブックによる情報発信を開始した。

その他、静岡大学防災総合センターと連携した「手石海丘における火山ガス調査」などの調査研究活動、養成講座やフォローアップ講座を核とするジオガイドの育成、「青少年のための科学の祭典」への参加や「第14回地震火山こどもサマースクール」の実施など教育機関との連携活動。アジア太平洋ジオパークシンポジウム（APGN2013）に参加して、ポスター発表とジオ菓子の紹介などの伊豆半島独自の取組紹介を行った。

キーワード: ジオパーク, 伊豆半島

Keywords: geopark, Izu Peninsula

## GGN加盟に向けたアポイ岳ジオパークの取組み Action of Mt. Apoi Geopark for the accession of GGN

原田 卓見<sup>1\*</sup>; 坂下 一幸<sup>1</sup>; 加藤 聡美<sup>1</sup>; 新井田 清信<sup>1</sup>  
HARADA, Takumi<sup>1\*</sup>; SAKASHITA, Kazuyuki<sup>1</sup>; KATO, Satomi<sup>1</sup>; NIIDA, Kiyooki<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 様似町アポイ岳ジオパーク推進協議会

<sup>1</sup> Mt. Apoi Geopark Promotion Council

2013年、アポイ岳ジオパークは、GGN加盟を目指してJGCに対し推薦の申し出を行ったが、ガイド内容やかんらん岩以外の持ち味の表現不足などの課題が多く見送りとなった。これを受けて推進協議会では、数度の会合を重ねながらその改善方策を検討してきた。

ガイド内容の改善については、かんらん岩が地下深くのマントルから現れたというダイナミックさや、それ以外の地形学的現象、高山植物と地質との関連などについて、情報を整理しながらガイド間でその表現手法についての学習を続けている。また、2014年度は、新たな視点を加えた新・ふるさとジオ塾で、新規ガイドの養成と既存ガイドの質の向上を図る予定。難解と指摘された看板やガイドブック等についても計画的な改善を図ることとしており、まずは外目に触れるホームページ、主要看板の内容修正を先行し、新規リーフレットの作成、地図アプリ・ガイドブック等の改訂に取り組んでいくこととしている。

歴史文化については、地域に息づいている先住民アイヌの伝統文化を積極的に紹介するとともに、2015年度を目途に歴史分野の専門員を確保する予定。外国語対応は、ALTを活用しているが2014年度は増員を図り2名体制とし、地域の英語教育の向上とガイドに活用していく。

アポイ岳のかんらん岩は、その規模・新鮮さから世界のかんらん岩を代表する存在である。同じかんらん岩を見どころに掲げる地域との交流は、GGNへの貢献という観点からも重要であり、2014年度はその道筋をつけていく予定。

アポイ岳ジオパークの原点であるアポイ岳高山植物の保護活動は、自然環境の変化やメンバーの高齢化などにより岐路にある。科学的情報を整理しながら目標の明確化を図るとともに、国の地域おこし協力隊を活用した外部人材の導入や子どもたちへの教育を推進するなど、活動の持続可能性を高めていく。

キーワード: ガイド, 情報ツール, アイヌの伝統文化, 地域交流, 自然保護活動

Keywords: guide, Information tool, Traditional Culture of Ainu, cultural exchange, Nature conservation activities



## 苗場山麓ジオパーク構想～3万年前から現在までの人と大地の関わり～ Mt. Naeba foot geopark concept -The person from 30,000 years before to the present, and relation of the ground -

佐藤 信之<sup>1\*</sup>; 中沢 英正<sup>1</sup>  
SATOU, Nobuyuki<sup>1\*</sup>; NAKAZAWA, Hidemasa<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 津南町教育委員会

<sup>1</sup> Tsunan town Board of Education

苗場山麓ジオパーク構想について概要を紹介します。

「苗場山麓ジオパーク」は、苗場山の北西麓に位置し、新潟県津南町と長野県栄村がエリアとなります。本ジオパークの特徴は、雪が3～4mも積もる中、現在1万人以上の人口を保ち、3万年前から現在まで、営々と紡がれたヒトの歴史文化そして大地との関わりを知る事ができるということです。

地球上では大気・海洋・陸地など様々な要因によって環境変化が、起こってきました。このような中で、本ジオパークの河岸段丘をはじめとする大地にある岩石や粘土、火山灰、泥炭層などの植物依存体や花粉などと考古学的遺物・遺跡の情報、水や雪、雨などの気象を通して、人類史における大地の関わりと植生変化などの環境変化が、ヒトに与えた影響を考えることができます。

苗場山麓は、約300万年前に陸化し、その上に苗場山の溶岩流によって大地の基礎が築かれました。そして、河岸段丘の発達、降雪、湧水によって、豊かな自然環境が、形成されました。この豪雪としての環境は、およそ8000年前から現在まで続いています。

先史時代には、その大地を舞台としてヒトの定住性が高まり、大地の資源利用が始まります。地形の形成とヒトの暮らしが、密接に関係しているのです。

例えば、5000年前の縄文時代には、大地にある粘土や赤土から独創的な造形である火焰型土器を作り、火山噴出物や大昔の堆積物である岩石を採取して石の道具である石器を作り、自然の恩恵を享受しながら、河岸段丘の上で集落を営み暮らしていました。また畏怖としてのこれらを示す考古学的資料が、多く出土しています。そして、大地と人との関わりを示す多くのデータが、あります。

この「苗場山麓ジオパーク」をキーワードに私たちは、ふるさとの事を真剣に考え始めました。本構想は、ジオ・エコ・カルチャーを含む大事なふるさとの宝を改めて見つめ直し、地域を愛し、学び、守り、次の担い手である子ども達と共に未来に伝えていこうというものです。

「ジオエッグ」という地域住民が主体となった団体が生まれ、多くの住民が、地域資産を回り、生まれ育ったふるさとの事を知ろう、学ぼうという意識を持ち始めています。

私たちにとって、長野県北部地震という災害を乗り越え、復興への希望の1つが、「苗場山麓ジオパーク」なのです。

キーワード: 苗場山, ジオパーク, 河岸段丘, 火山灰, 考古遺物

Keywords: Mt.Naeba, geopark, river terrace, tephra, archeological remains

## 海に浮かぶ博物館 天草ジオパーク構想 Amakusa Geopark plan

國武 裕子<sup>1\*</sup>; 金澤 裕巖<sup>1</sup>; 鶴飼 宏明<sup>1</sup>; 長谷 義隆<sup>1</sup>  
KUNITAKE, Yuko<sup>1\*</sup>; KANAZAWA, Hiroyoshi<sup>1</sup>; UGAI, Hiroaki<sup>1</sup>; HASE, Yoshitaka<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 天草ジオパーク構想推進協議会

<sup>1</sup> Amakusa Geopark planning promotion committee

大小120もの島々で構成される天草諸島は、1億年という時間の記憶が刻まれ、生命の不思議を感じさせてくれる、まさに『宝』の島である。その島々で繰り広げられる人の営みによって独自の文化が生まれ、海と島の幸に恵まれた魅力ある天草。天草ジオパーク構想では、大地の遺産（地質・化石・地形）、生態系、そして人の歴史、石を使った文化、産業など、この地域を特徴づける5つの要素を柱と位置づけ、多くの人たちに知ってもらい、その保全と継承に力をいれている。

天草地域は白亜系から古第三系の堆積岩が広く分布し、多様な化石と化石燃料の無煙炭を産出する。堆積岩に貫入する流紋岩は変質を受け、「天草陶石」と呼ばれる良質の鉱石になり、九州地方を中心とする日本各地の陶磁器の原料を供給してきた。地域に残る信仰の対象として大地の遺産に関わる事例も多く、また、海に囲まれた島々はケスタ地形や「天草五橋」に代表される松島地域の多島海など、地質構造と岩石の分布に起因する風光明媚な地形づくりだしている。そして、我々はその地形をもつ島々により育まれた豊かな海の生命の恩恵をうけている。また、現場で活動するガイドは「ジオパークとはなにか」を的確に説明するジオパークの普及者であると共に、地域住民と一体になった取り組みまたは教育普及などに重要な存在といえよう。この構想ではこの大地の遺産に恵まれた島々の自然の保護と、そこに暮らす人々の文化を体験できる地域づくりを行い、地域振興や観光振興等を含めた総合的な展開を図るものである。

天草御所浦ジオパークは当構想地域の一部であり、平成10年からの「全島博物館構想」に基づき、化石を軸にした自然環境教育プログラムを設けるなど積極的に教育活動を行ってきた。日本ジオパーク認定後は地域住民と一体となったガイド活動や地域振興事業が活発となった。その結果、地域住民自ら大地の遺産を保護・活用する意識が高まり。そのことが交流人口の増加に繋がっている。天草ジオパーク構想は天草御所浦ジオパークで培った「御所浦効果」が天草全域に浸透することを期待し、天草の大地の遺産を活用する取り組みである。

キーワード: 島, 海, ジオパーク, ガイド

Keywords: Island, sea, geopark, guide

## 下北半島ジオパーク構想「4つの海がもたらす恵みと島弧の4要素が集積する大地」 Shimokita Peninsula Geopark Design;The glory of 4 oceans,one land 4 geological elements

新谷 智文<sup>1\*</sup>; 宮下 順一郎<sup>1</sup>; 植田 勇人<sup>1</sup>; 伊藤 道郎<sup>1</sup>; 光野 義厚<sup>1</sup>  
ARAYA, Tomofumi<sup>1\*</sup>; MIYASHITA, Junichiro<sup>1</sup>; UEDA, Hayato<sup>1</sup>; ITO, Michio<sup>1</sup>; MITSUNO, Yoshiatsu<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 下北半島ジオパーク構想推進協議会

<sup>1</sup> shimokita peninsula geopark design promotion meeting

### 【申請地域の紹介】

下北半島は、青森県の太平洋側から北に突き出した本州最北端の地域にあり、東は太平洋、西は日本海、南は陸奥湾、北は津軽海峡と四方を趣異なる海域に囲まれた1市1町3村を含むエリアである。

エリア内には、恐山の金鉱床やカルデラ地形、仏ヶ浦のグリーンタフ、田名部平野北海岸の第四紀層の大露頭、尻屋崎の付加体など、日本列島の基本構造を形づくる主要な4つの要素を学べる地質資源のほか、江戸時代に北前船により上方文化の影響を受けた歴史・文化資源や海峡を挟んだ蝦夷地など北方域との交流の歴史、大正初期に当地域の繁栄を支えた黒鉱鉱床である安部城鉱山跡などの産業資源、ヒト以外の霊長類で世界最北に生息しているニホンザルや津軽海峡に引かれる動植物の分布境界であるブラキストン線、および日本海からの津軽暖流や冬の季節風と太平洋の寒流や「やませ」に育まれた対照的な生態系など、多分野において価値の高い資源が豊富に存在している。

### 【日本ジオパークネットワークへ加盟申請する理由】

当地域には大学や公設博物館が存在しないため、これまで地域住民は高等教育に触れる機会に恵まれず、地域の宝である資源の価値や学術的な重要性について十分な知識を持つことができず、郷土への愛着が育みづらい環境であった。

しかし、ジオパーク活動によって地域住民が高等教育に触れる機会が生まれ、地域資源の素晴らしい意義を認識したことで、郷土への愛着「下北愛」が醸成されつつある。

今後、ジオパーク活動により、次代を担う子どもたちが地域資源に直接触れ、学び、楽しむことでこの地の価値や重要性を認識し、次代の地域づくりへの意欲を高める効果を期待することが、日本ジオパークネットワークへの加盟を申請する理由である。

### 【下北半島ジオパーク構想のテーマ及びストーリー】

日本列島は大局的には、主に付加体でできた非火山性山地、活火山が並ぶ脊梁山脈、それらの間の第四紀層に埋積された堆積盆、およびグリーンタフからなる日本海側の山地という地形・地質の4つの基本要素で構成されている。

当地域は日本で唯一、太平洋と日本海の両海に接するため、日本列島を形成する大地の大局的な4大要素が一ヶ所に集約されているといえる。

また、四方を趣異なる4つの海域に囲まれている地域性を活かし、それぞれの海域特性に合った魚種・漁業方法が発展し、漁業が地域経済の根幹を支える業種となっているほか、江戸期の北前船がもたらした文化なども海によってもたらされたものと言える。

このことから、当地域全体のテーマを「4つの海がもたらす恵みと島弧の4要素が集積する大地」と設定し、地質的・文化的小および地理的要素により「東海岸ゾーン：太平洋からの贈り物」、「田名部平野ゾーン：海と陸のせめぎあい」、「恐山・むつ燧岳火山ゾーン：火山と温泉の恵み」、「西海岸ゾーン：裂ける大地」の4つのゾーンとそれぞれの特徴を示すサブテーマも設定した。

### 【JGNへの貢献】

大学や公設博物館等の高等教育機関が存在しない地域において、「ジオパーク」活動が生涯学習や子どもたちの高等教育に触れる機会づくりにどこまで貢献できるのかについて、JGN中で課題を共有し、意見交換や連携を深めることで、ジオパーク本来の役割や価値を高めることに貢献したい。

さらに、日本では古くから山々や大木、岩などに神が宿ると考えられ信仰の対象として崇め畏れてきたが、当地域には「恐山」や「仏ヶ浦」といった地域住民の信仰の対象とされる場所もあり、恐山では「イタコの口寄せ」が行われ、亡き人の声を聞くために全国各地からの訪問客が後を絶たない。

このことから当地域では、地質学的視点だけではなく、日本人が持つ信仰心という目に見えないテーマも取り込んだ「ジオパーク」を創り上げていくことで、JGNへ貢献していきたい。

### 【まとめ】

当地域には、他の地域には存在しない特異な地質があるわけでも、他を圧倒するほど重要な地質資源が存在するわけ

でもない。しかし、当地域は国内で唯一、太平洋と日本海という2つの海に接しているため、日本列島の海と陸の双方を俯瞰的に学べる利点がある。また半島という中において、住民一人ひとりに「同じ下北」という感情が育まれている。

住民自らが地域の宝を守り磨き上げること、および来訪者を迎える中で地域の宝の価値を再認識することで、地域に誇りを持ち地元を愛する気持ちが醸成され、それが後世へと続くことによって、郷土を愛する気持ち「下北愛」の深まりが、地域をより魅力的に変え、他地域から見える「下北」の魅力向上につながっていく。

地域にある資源が持つ意義を住民が認識し、地域の魅力を再発見するとともに、新たな視点に立った観光振興策を行う気運を更に高めるために、当地域は日本ジオパークネットワークへの新規加盟を申請するものである。

キーワード: 日本ジオパーク, 4つの海, 4つの地質要素, 下北愛(郷土愛), 信仰心

Keywords: Japanese national geopark, 4 oceans, 4 geological elements, Love for Shimokita(Love for one's home), Faith;Mt.Osorezan



## 南紀熊野ジオパーク構想の推進について The Promotion of Nanki Kumano Geopark Plan

東川 智昭<sup>1\*</sup>; 橋爪 正樹<sup>1</sup>; 田原 敬治<sup>1</sup>; 谷脇 智和<sup>1</sup>  
HIGASHIKAWA, Tomoaki<sup>1\*</sup>; HASHIZUME, Masaki<sup>1</sup>; TAWARA, Takaharu<sup>1</sup>; TANIWAKI, Tomokazu<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 南紀熊野ジオパーク推進協議会

<sup>1</sup>Nanki Kumano Geopark Promotion Council

南紀熊野ジオパーク構想地域は本州最南端となる紀伊半島の南部地域で、和歌山県新宮市、白浜町、上富田町、すさみ町、那智勝浦町、太地町、古座川町、北山村、串本町の1市7町1村を範囲としております。

東西、南北ともに60kmで総面積は約1,356km<sup>2</sup>となり、1,000mを越える急峻な山地から、沈水海岸による入り組んだ海岸線まで、様々な地形をもつ地域です。

南紀熊野地域は、温暖湿潤な恵まれた気候条件にあるものの、大部分が険しい山々に覆われているため、平野が少なく、道も整わなかったことから古くから林業や漁業、海運業が人々の生活をささえてきました。また、この地域の地形や自然、文化は古来より遠く離れた都人たちにとって畏敬の対象となり、熊野信仰の地として多くの人々が訪れ栄えた歴史があります。そして近代には林業や漁業、海運業の基地として、また鉱物資源の採掘や製紙関連産業、温泉や観光開発などにより栄えた地でもあります。

しかし、近年では、道路、鉄道、港湾、空港が整備され、交通の利便性はかつてに比べて大きく向上したものの、都市部との格差は大きく開き、過疎化や高齢化の進展、産業の衰退が目立ってきています。

このような状況の中で、地球科学の進歩により、この地域の特異な地質や地形の形成過程が徐々に明らかになり、その存在自体も他に類をみないものであることがわかってきたところです。この地域は、プレートの一連の動きによって生み出された3つの地質体で構成されています。中央部は海洋プレートの沈み込みによって海溝付近で作られた付加体で構成されて、東部と西部は、付加体上で形成された前弧海盆堆積体で構成され、さらに東部には巨大な火成岩体が分布しています。プレートとの出会いが生み出したこれらの3つの大地が存在する地域であり、プレートの沈み込みという地球の大きな営みをうかがい知ることができ、大地形成過程を示す3つのタイプの典型的な地質体がそろって見られる地域です。

また、この地域で育まれてきた文化や歴史、産業や人々の生活は、この地域の地質や地形を利用することによって培われたものであるとともに、この地域の誇りであり、後世に引き継ぐべき貴重な資産であるという認識も広まりつつあります。

南紀熊野地域は、2004年に世界遺産登録された「紀伊山地の霊場と参詣道」の基幹となるエリアであり、「霊場」や「参詣道」とその「文化的景観」はすでに世界的に価値の高いものとして評価されています。だがそれだけにとどまらずこの地域の魅力や価値は、大地形成のダイナミズムとこの地域の自然の形成過程、自然と人々の向き合いを探ることによって、さらに高めることができると考えております。そしてそれはこの地域に住む人々の自信と誇りにつながり、資源として活用することで新しい生業や交流の創出につながるものとの考えのもとでジオパーク活動の取り組みが進められているところです。南紀熊野の地においてもジオパーク活動を進めることが、地域住民が主導する地域の持続可能な発展の太い柱になると考え、日本ジオパークネットワークへの加盟を申請します。

そして、この地域内に、世界遺産、ラムサール条約登録湿地、国立公園が存在するという特色を活かして、それらと連携することで相互の価値を高めることができるという新しいジオパークの活動モデルを示すことで、日本ジオパークネットワークへの貢献を行いたいと考えています。

キーワード: 南紀熊野, ジオパーク

Keywords: Nanki Kumano, Geopark

## 紫峰・水郷のジオが織りなす悠久の歴史と、未来へ引き継がれる人々の暮らし Geographic History of the Purple Mountain and Suigo and the Life Carried on to the Future

柴原 利継<sup>1\*</sup>  
SHIBAHARA, Toshitsugu<sup>1\*</sup>

<sup>1</sup> 筑波山地域ジオパーク推進協議会  
<sup>1</sup> Mt.tsukuba Area Geopark promotion Council

筑波山は広大な関東平野の北東部に位置し、同平野からは希有な独立峰の眺望を有する。朝夕に山肌の色を変えると  
ころから、紫峰とも称される。山頂部は約 7,500 万年前に貫入・隆起した硬い斑れい岩によって急峻な双峰を成し、山  
腹・山麓はその岩屑や花崗岩の風化岩屑により広く覆われ、ゆるやかに裾をひく美しい山容を有する。加えて、周辺地  
域は関東平野の北東端をなし、第 4 紀の海水準変動等が広い台地・低地とともに、霞ヶ浦を中心とする水郷の風光明媚  
な景観をもたらしている。<br>

それら「ジオの恵み」と相まって、筑波山地域は、古代から「西の富士、東の筑波」と称される関東のランドマークと  
して、世界文化遺産に指定された富士山と並び、山岳信仰や多くの日本文化・芸術の発祥の舞台となってきた。

また、霞ヶ浦の水運、石材・焼物業などに代表されるジオが織りなす人々の活動は、江戸（東京）と近接して、独自の  
発展を遂げてきた。

特に明治期には国会議事堂や日本銀行、日本橋などの建築に稲田石等が使用されるなど日本の近代化を支えた。現代  
は、山麓の台地上に筑波研究学園都市が建設されるなど、国内外の新しい活力を得て、未来の創造へと歩みを進めている。

地質・地形の壮大な時間軸から、本地域の自然、歴史・文化、人々の営みを眺めてみても一見繋がりは見えない。

しかし、そこに様々な補助線を引いてみるにより、わくわくするほど楽しく、愛らしく、魅力的な繋がりが見え  
てくる。

筑波山地域ジオパークにおいては、本地域のジオが織りなす悠久のストーリーを一連のものとして眺め、再発見する  
とともに、地域内外の人々とともにその価値を共有し、未来に引き継いでいくことを主眼として活動を行う。



## 立山黒部ジオパーク構想「38億年×高低差4000m! 体感しようダイナミックな時空の物語」

### Concept for the Tateyama Kurobe geopark: Feel the tales of dynamic time-space, 3800Ma history and 4000m topography!

増渕 佳子<sup>1\*</sup>; 大野 博美<sup>1</sup>; 丹保 俊哉<sup>1</sup>; 藤田 将人<sup>1</sup>; 石須 秀知<sup>1</sup>; 竹内 章<sup>1</sup>; 中尾 哲雄<sup>1</sup>; 堀内 康男<sup>2</sup>  
MASUBUCHI, Yoshiko<sup>1\*</sup>; OONO, Hiromi<sup>1</sup>; TANBO, Toshiya<sup>1</sup>; FUJITA, Masato<sup>1</sup>; ISHIZU, Hidetomo<sup>1</sup>; TAKEUCHI, Akira<sup>1</sup>; NAKAO, Tetsuo<sup>1</sup>; HORIUUCHI, Yasuo<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 立山黒部ジオパーク推進協議会, <sup>2</sup> 立山黒部ジオパーク支援自治体会議

<sup>1</sup>Tateyama Kurobe geopark Promotion Conference, <sup>2</sup>Tateyama Kurobe geopark Support Municipalities Conference

富山県東部地域(9市町村)の大地を地史や地理に関わる数字で端的に表現すると、「38億年と4000m」という値になる。所属する各地区で取り組まれてきた様々なガイド活動を通してこの数字のスケール(時空間)を「伝え・守り・活かす」。これこそが立山黒部ジオパーク構想の神髄である。

本地域は日本列島というアジア大陸の活動的縁辺にあって、大陸の断片である飛騨帯に属する本地域は、中生代からの断続的な火成活動と地殻変動、そして気候変動の影響下で、様々な内的・外的営力が作用した結果、深さ1000mの深海湾と標高3000m級の急峻な山脈がコンパクトに収束したダイナミックかつ独特の地形・地質を有する場所である。本地域はまた、約80万年前という世界で最も新しい花崗岩が露出するほどに急速な地殻変動が行われている地域でありながら、約38億年前という太古の地球の記憶を呼び起こす鉱物や古生代における垂大陸同士の衝突の痕跡を数多く残していることなど、「地学の百科事典」ともいべき多様な物象・事象を内包している。さらに、こうした地形・地質の要因が複合的に絡み合い、現世では、極東アジアの南限として現存する氷河から海底に至り湧水として循環する水の動きに象徴されるとおり、他地域に類を見ない自然環境・生態系が成り立っている。

本地域の魅力はなんといっても風土に起因した独特で多様性に満ちた自然環境とそれに育まれた大地の恵み、海の幸である。本地域では早くから、これらの資源が大切な守るべきものとしての理解が進み、全国に先駆けて成立したナチュラリスト制度などにより保護保全と普及啓発がおこなわれ多くの成果・実績を上げている。とくに、数多くのガイド組織の活発な活動は、地域内にある北アルプスの主稜から富山湾の臨海平野部を網羅するほどである。しかし、ふだん享受できている数々の恩恵のかげには上述の大地の物語があることを理解している住民、旅行者は多いとは言えない。一方では、地域学の調査活動を行ってきた住民の中には、大地の重要さに気づき、その魅力を知りたいという思いが着実に萌芽し、力強く成長を始めている側面もある。

われわれは、このような課題や意識の昂揚を踏まえ、「風土こそ地域形成の原点」と考え、ジオパーク活動を通して地域の潜在的魅力を掘り起こし、新しい地域経済循環の歯車(連携)の組み合わせを創造しようとしている。そしてその中心には「人と人が作り出す連携」が必要であると考えている。我々はそのためのどんな枠組みにも規定されず、新しい連携の形を求めてどん欲に理想を追い求めることができるパイオニアと、それを地域社会・地域行政の連携によって支える仕組みを作りだした。本地域は日本における民間と行政の協業によるジオパーク経営を持続させ、その在り方を発信していきたい。

キーワード: 立山黒部ジオパーク構想

Keywords: Tateyama Kurobe geopark conception